

木づかい森づかいから始める水づくり

特定非営利活動法人 水守の郷・七ヶ宿 理事長 海藤 節生

1. はじめに

当町は宮城県民 183 万人の水瓶「七ヶ宿ダム」を抱える水源地である。水を守るために森をつくるという目標を掲げ様々な活動を行ってきた。しかし高齢化率 50%に迫る過疎の山村が単独でこの任を担うことは不可能である。山に関心のない山主、ライフスタイルから消えつつある木製品。平成 22 年度、我々は宮城県の緊急雇用対策に企画提案書を書いた。ある一定の森林面積が持つ付加価値を川下からの利用を視野に入れながら定量的に分析するものであった。林齢 30 年、ある程度間伐が行われてきた杉林 10 a から切り出した C 材を現場で製材し材を取り利用した。また、材に利用できないものや枝葉は炭化して山に戻した。水をつくるのは森でありそのために木をつかう。こういった当たり前のことをする共同体を「水づくり」という切り口で流域市民と作っていくことで不足するマンパワーを補填することが出来るのではないか？ 山主に関心を持たせることに繋げられるのではないかと考えた。

2. 研究方法

宮城県刈田郡に在する七ヶ宿町。「七ヶ宿山がっこ」これが共同体の名称である。民有林 10 a がこの活動の第一歩であった。使用する林業機械はチェーンソーだけである。原木をそのまま生かす花壇づくり、キノコの植菌、加工材はフィールド近くの基地をつくる建材として、また木工などに利用する。杉を焼いて作るオリジナルコースターづくりやマイカスタネットづくりで木を身近に感じてもらうワークショップを実施した。お昼は必ず森のエネルギーを利用する。かまどでの炊飯に加え、森に石窯をつくりピザ焼き体験、更には野天風呂と木を利用することで森は蘇っていった。炭化した炭は森に蒔かれ、酸性化した土壌を再生していく。今年度からは、雪を活かし冬の事業も積極的に実施している。

3. 結果及び考察

木づかい森づかいという共通の目的を持って個人やファミリーが毎月第 3 日曜日に開催される「山がっこ」に集い交流が広がりはじめた。参加者たちは山を自分たちの庭としてとらえ、季節の変化を肌で感じながら時を過ごす。担い手不足といわれる中、森に触れることで森の姿が変わっていくのを目の当たりにした子供たちは、行動することの素晴らしさを知る次世代である。林業界だけに留まらず、農山村交流のモデル事業としても評価を受けている。地方振興事務所や国土交通省など様々な行政や団体と連携した事業展開が功を奏していると感じている。「水づくり」という大きな目標(志)を達成するために「誰がやったのか」ではなく「何をするのか」をひとつひとつ形にしていくことで日本の森林が未来に受け継がれていくのであろう。